

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	迫田 博子 比較社会文化学専攻2015年度生		論文題目	葉石濤作品における文学観の実践	
審査委員	主 査:	宮尾 正樹 教 授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 可	
	副 査:	和田 英信 教 授		「否」の場合の理由	
	副 査:	伊藤 さとみ 教 授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
	審査委員:	大塚 常樹 教 授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
	審査委員:	赤松 美和子 准教授 (大妻女子大学)		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
学位名称	博 士	(人文科学)		<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
(英語名)	(Ph. D. in Taiwanese Literature)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について	

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文は、台湾文学の代表的作家葉石濤(1925～2008)の小説の分析を通じて、彼の文学観とその実践について考察したものである。葉は、日本統治時代に日本語による創作を開始し、戦後創作言語の転換を経験した。台湾の近代史を背景とする多くの作品を発表する他、『台湾文学史綱』(1987)などで、台湾文学史の独自性、自立性を主張した、戦後第一世代の最も重要な作家の一人であり、近年は、ポスト・コロニアル的視点やジェンダー論的アプローチからの新たな評価も始まっている。

本論文は序章、終章と本文五章からなり、第一章では葉石濤の創作活動を概観した上で、特に葉が大きな影響を受けたとされる、「人種・時代・環境」を文化の三大要素とするテーヌの理論の台湾および葉における受容について検討する。第二章では、『台湾男子簡阿淘』(1996)を取り上げ、主人公が戦後台湾の歴史を生き抜く中で経験した二種類の喪失に着目して、この作品が主人公の人生に寄り添いながら、喪失から再生を経験した台湾社会全体をも描いていると主張する。第三章では、日本植民地時代に生きる台湾人青年の物語である「獄中記」(1966)を、作品中の日本表象、とりわけ先行研究ではあまり着目されなかった「日本」表象の両義性に焦点をあてて論ずる。第四章においては、先住民族の女性を主人公とする『シラヤ族の末裔・潘銀花』(1990)について、先行研究で往々にして見られる、家父長制の漢族社会と母系制の先住民族社会の二項対立という図式を相対化して、ヒロインと結ばれる漢族男性人物における男性性の多層性を主張し、同時にヒロインの価値観の二重性を指摘する。第五章では、「晴天と曇天」(1969)を取り上げ、多くの先行研究がそのユーモア手法に着目してきたことを指摘した上で、笑いの手法を整理し、同時に、作品に表出される不条理性とそれを実現する風土性について考察する。全体として、テーヌの三大要素を葉がどう受容し、逸脱したかの解明を柱として、台湾現代文学、それを育んだ台湾の歴史と風土を葉がいかに発見し、テキスト化したかを明らかにする論文となった。

審査委員会は12月24日、1月30日(書面)、2月22日に行われた。日本統治時期、70年代以降に比べて研究の蓄積が薄い戦後第一世代の代表である葉の文学論をテキストに即して論じた点が高く評価されたが、最近の研究への目配りが足りない、検討する作品の配列の原則が明示的でない、章によって、たとえば、イーファー・トゥアンの場所論など、いろいろな理論を恣意的に援用しており一貫性を欠く、もっとも大きな影響を受けたとされるテーヌの理論に照らした検討が欲しい、などの指摘がなされ、申請者はそれに対応して必要十分な修正を行った。2月22日の公開発表において、論文の内容をわかりやすく説明し、聴衆の質問にも適切に応答した。引き続き行われた最終試験において、学位にふさわしい学力を有することが確かめられた。以上に基づいて、本論文が博士(人文科学)、Ph. D. in Taiwanese Literatureにふさわしいものと委員会として判断する。